

幼児のあそびの発達

——異年齢集団における自由あそびの観察——

田 中 國 夫
田 淵 創*

問題 松村康平¹⁾は幼児の活動を次の5つに分けてとらえている。

生存活動……生存に必要な活動

遊び ……自己関係の発展がもたらされる自発的活動

劇 ……人間関係の発展がもたらされる創造的活動

仕事 ……物関係の発展がもたらされる生産的活動

生活活動……生活に必要な活動

幼児にとって遊びが大切であることはいまさらいうまでもない。幼稚園の創始者であるフレーベル(Froebel, F. W. A.)²⁾は、「幼児において人間の発達上最高の働きをなすものは遊戯である。なぜ遊戯が最高の働きをなすかといえば、遊戯において、子どもは、内部の必要に応じて自ら自由に活動し、内部的体質を外部に表わすからである。遊戯は幼児がなす所の最も純粋な、また最も精神的な活動である。独り人間のみならず、万物の内に隠れている内部的生命の模範である。それゆえ、遊戯はこれをなす者に喜悦、自由、満足、休息および外界との調和を与えるものである」として子どもの遊戯を奨励し、それを保護して、決して妨げるようなことがあってはならないことを訴えて

いる。

このように幼児にとって遊びは生活そのものとも考えられるが、同時に幼児期は著しい発達期でもあるので、発達に対する遊びの役割は必然的に大きくなる。深谷和子³⁾は遊びの機能を次の5つにまとめている。(1)身体的、運動能力的な発達、(2)社会性の発達、(3)情緒の安定化、(4)自発性、自主性の獲得、(5)知的能力の開発。

遊びは幼児のほとんどすべての機能を発達させるが、その幼児の発達に従って、遊びも発達するものである。ピアジェ(Piaget, J.)⁴⁾は子どもたちの自然的な遊びを観察して、(1)機能的遊び(あるいは実践の遊び)(0才～2才)(2)象徴的遊び(2才～7才)(3)ルールのある遊び(7・8才～11・12才)というように遊びを発達的に分類した。またパーテン(Parten, M. B.)⁵⁾は幼児の“社会的参加度”によって、遊びを分類している。彼女は2才未満から4才11カ月までのナースリー・スクール(Nursery school)の子ども男児22名、女児20名について、朝1時間の自由あそび時間中に行動を反復的短時間見本法(1人の子どもを日に1分間ずつ時刻をずらせて観察する方法)により観察記録した。そして“社会参加度”により行動を、(1)遊びではない、何もしていない行動、(2)ひ

* 昭和49年、関西学院大学大学院社会学修士、現はこぶね幼児教育アカデミー主事、この研究の調査に当って、昭和51年社会学部卒、岸明美、藤井道子、同52年卒、池内恭子、森雅代、各氏の協力を得た。ここに謝意を表する。

1) 松村康平、子どものおもちゃと遊びの指導、フレーベル館、1970。

2) Froebel, F. W. A., 岩崎次男訳、人間の教育I 明治図書、1960。

3) 深谷和子、遊びは勉強を妨げるか、児童心理、第30巻12号、1976、p.15—22。

4) 大伴茂、ピアジェ幼児心理学入門、同文書院、1970。

5) Parten, M. B., Social participation among preschool children, J. of Abnormal and Social Psychology, 1932. 27. p.243—269。

(パーテンの研究は、小林さえ、児童集団の研究と集団形成の問題、千輪浩監修、児童心理学、誠信書房、1963、に詳しい)

とり遊び、(3)傍観的行動、(4)平行遊び（似たおもちゃをもっているが、べつべつに遊んでいる）、(5)連合遊び（遊び道具の貸し借りをしたり、他の子どもと連絡はしているが、作業に分担も組織もない）、(6)協同的・組織的遊び（一緒にものを作ったり、ゲーム遊びをしたりする組織的集団、リーダーが1名または2名いる）に分類し、各社会的行動の型の出現の頻度をもとめた。（図1）この結果から、年齢が高くなるにつれて、徐々に社会性の高い集団遊びに参加することが多くなることがわかる。

今回の調査は、こうした幼児の遊びにおける発達ぶりを、4つの異なる年齢段階（6才児クラス＝A組、5才児クラス＝B組、4才児クラス＝C組、3才児クラス＝D組）の幼児集団の自由あそびを観察することによって見い出そうとしたものである。我々は特に、幼児たちの使用した遊具と

方法 1. 対 象

年 齢 ク ラ ス		A	B	C	D	全 体
50年秋	平均年齢	6才1カ月	5才0カ月	4才2カ月	3才1カ月	4才5カ月
	人 数	男6・女1	男3・女3	男4・女2	男5・女2	男18・女8
51年春	平均年齢	5才8カ月	4才8カ月	3才7カ月	2才11カ月	3才11カ月
	人 数	男3・女1	男3・女1	男9・女4	男3・女2	男18・女8
51年秋	平均年齢	6才1カ月	5才2カ月	4才0カ月	3才2カ月	4才1カ月
	人 数	男2・女1	男3・女2	男10・女4	男6・女2	男21・女9

2. 観察日時：50年秋：昭和50年10月から11月にかけて5日間。51年春：昭和51年5月から6月にかけて5日間。51年秋：昭和51年10月から11月にかけて5日間。いずれも3時のおやつが終了したあとの自由遊戯時間の45分間。

3. 観察場所、屋外遊戯場、約1000m²に右記の図のように14種類の遊具が設置されている。遊具の使用法は次のとおりである。

- ① 土山、土砂を積んで造られた約1mの高さがある土の山。
- ② ジャングルジム
- ⑧ 円盤、鉄製パイプで逆円錐形の遊具で、こしかけて、ぐるぐる回わして遊ぶ。
- ④ すべり台、高さ約3mとかなり高い。すべり棒がついている。
- ⑤ 遊動円木、約2mの長い木の上にまたがっ

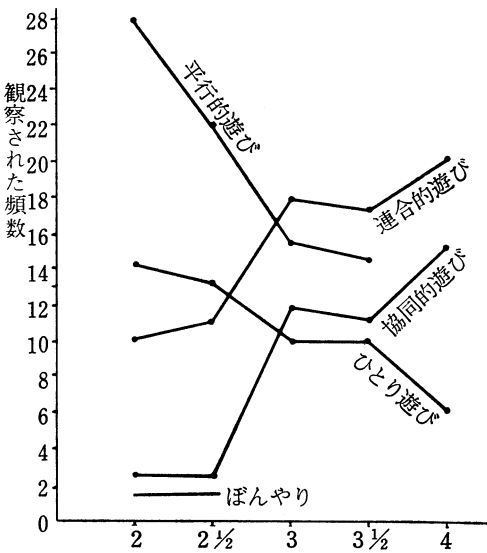


図1 遊びの種類の発達 (Parten, M. B. 1932)
彼らの仲間関係に視点をあてて、分析を試みた。

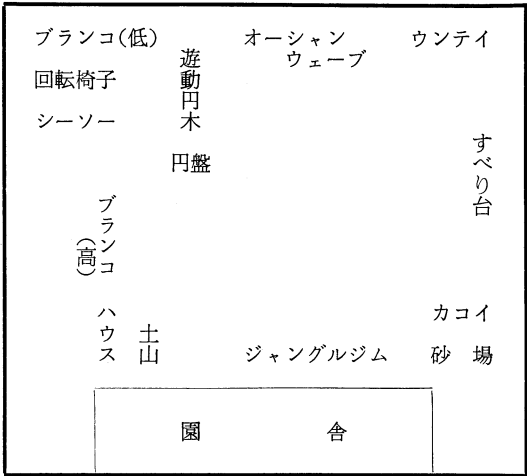


図2 屋外遊戯場見取図

- て乗り、ブランコのようにこいで遊んでいる。
- ⑥ ブランコ (高)、約4mの高さ。

- ⑦ ブランコ (低), 約 2 m50cm の高さ。 小屋である。
- ⑧ オーシャンウェーブ, 高さ約 3 m の円錐形の遊具で, 波のようにこぎながらぐるぐる回して遊ぶ
- ⑨ 砂場
- ⑩ ハウス, 家のかたちをした, 腰かけつきの
- ⑪ カコイ, 高さ 70cm ほどの柵でかこまれた 3.3m²ほどの箱型の遊具で, 出入口もついている。
- ⑫ シーソー, 4 人乗りの舟型シーソー。
- ⑬ 回転椅子, 4 つの腰かけがついて, ぐるぐるまわして遊ぶ。

表1 幼児の遊具の利用率

遊 具	年齢クラス		A		B		C		D		全 体		検 定	
土 山		.152	.277	.106	.058	.107	.050	.075	.047	.147	.069	***	***	
			.012											
			.046											
ウ ン テ イ		.081	.060	.077	.051	.023	.027	0	.006	.039	.039	***	***	***
			.115											
			.083											
ジャングル・ジム		.107	.084	.111	.119	.079	.060	.028	.065	.073	.078	***	***	***
			.096											
			.176											
円 盤		.062	.039	.053	.066	.051	.038	.078	.042	.056	.048	n. s.	***	***
			.072											
			.102											
砂 場		.074	.063	.048	.072	.131	.113	.121	.106	.091	.097	***	***	***
			.133											
			.019											
ブ ラ ン コ		.051	.039	.008	.057	.070	.070	.124	.067	.076	.064	n. s.	n. s.	
			.060											
			.065											
カ コ イ		.010	.011	.029	.022	0	.024	.011	.016	.012	.019	n. s.	n. s.	
			.009											
			.009											
す べ り 台		.089	.112	.101	.077	.103	.080	.203	.120	.134	.092	***	***	***
			.116											
			0											
遊 動 円 木		.039	.056	.097	.077	.164	.103	.149	.104	.114	.085	***	***	***
			.009											
			.037											
ハ ウ ス		.044	.028	.019	.051	.033	.050	.018	.065	.024	.052	n. s.	n. s.	
			.036											
			.093											
シ ー ソ ー		.012	0	.034	.038	.042	.027	.036	.053	.026	.031	***	***	***
			0											
			.056											
回 転 椅 子		.013	.011	.058	.034	.019	.029	.032	.040	.028	.030	※	※	
			.012											
			.019											
オーシャンウェーブ		.014	.007	.014	.018	.014	.015	.036	.019	.018	.017	n. s.	※	n. s.
			.036											
			0											
そ の 他		.253	.214	.184	.260	.164	.314	.089	.249	.161	.280	***	***	***
			.289											
			.296											

注1. この表は(遊具を使用した人数)を(使用する機会をもつ総人数)で割ったものである。

注2. 各コラムの数字は

50年秋
51年春
51年秋

 3回の平均 となっている。

注3. 検定は X² 検定で, 4つの年齢クラス間の差を検定している。*** は0.1%水準で ** は1%水準で, * は5%水準で有意差があったことをしめしている。以下同様。

⑭ ウンティ。

4. 手続き、子ども達は、おやつが済むと、屋外に出て自由に遊ぶことになっている。観察者は3名で園舎から行ない、一部ビデオ・コーダーを利用した。観察は5分刻みに45分間継続し、10回ずつ行なったが、一部の園児は父兄のお迎えが来たため、回数の少ないものもある。記録はあらかじめ印刷しておいた見取図風記録用紙に遊具ごとに園児名を書き込んだ。ただ、遊具を使用せずに遊んでいる園児はその場所へ書き込んだが、結果の整理の際は、その他として扱った。

結果とその考察 まず、子ども達がどのような遊具を利用して遊んでいたかを年齢クラスごとにまとめたものが表1である。

各年齢クラス間にはかなりの違いがみうけられた。50年秋では、A組では土山、その他が多い。土山では単にかけ登ったり、おりたりするだけでなく、テレビの主人公などの役割を決め、〇〇ごっこ遊びに利用している。またその他では、“最初の一步”や“かくれんぼ”等の集団遊びがよく見かけられた。これらの集団遊びには、B・C組の一部をも加えて行なっていた。B組では、土山、その他に加えて、ジャングルジムやウンティなどの運動能力を必要とする遊具に人気が集まっている。C組になると、遊動円木や砂場をよく利用している。遊動円木は一種の汽車ごっこであり、はっきりとした役割分担ではないが、“こぎ手”と“のる人”が存在している。D組では、すべり台、ブランコなど、単調な遊具、1人で遊ぶ遊具の割合が多くなる。

51年度になると、各年齢クラスの人数が非常にアンバランスになり、年齢クラス間の差異は50年秋ほど明確ではなかった。特に、前回観察されたようなごっこ遊びや“かくれんぼ”等の集団遊びがみられなかったのが大きな特徴であった。やはり、リーダーとなるべきA組の人数が少ないことがひびいているように思われる。従って、A組のウンティ、すべり台、ジャングルジム、円盤などの遊具利用率が高くなっている。すべり台でも付属しているすべり棒をよく利用していることを考え合わせれば、これらはいずれも、握力、腕力、脚力など運動能力を要求される遊具である。B組もこれらの遊具をよく利用しているが、砂場の遊び

も多くなる。C組では砂場が圧倒的で、遊動円木がこれに続いている。D組ではシーソー、遊動円木、回転椅子などに人気が集まっている。秋になると、A、B組は相変わらず、ジャングルジム、円盤、ウンティなどの使用率が高い。これに対して、C・D組では、その他が圧倒的に多くなっている。ただ運動場を走り回っているという姿がよくみうけられた。春の観察でよく利用されていた砂場が激減していることと合わせて、考えれば、当然のことながら、気候によって利用される遊具が左右されることを如実にしめしている。遊具では、やはり、すべり台、遊動円木などでよく遊んでいる。全体を通してみると、A組では、土山、ウンティ、B組ではジャングルジム、円盤、C組では砂場、D組ではすべり台、遊動円木、シーソー等となり、年齢が増すにしたがって、“静的な遊び”から“動的な遊び”へ、そして単調な遊具から、運動能力や技術を要する遊具へと変化しているといえる。ただ“ひとり遊び”から“平行遊び”、“連合遊び”を通して“協同的・組織的遊び”への発達的变化は、50年秋では観察されたが、51年度ではあまり見られず、この結果だけでは断定できない。

表2 遊具使用種類数の比較

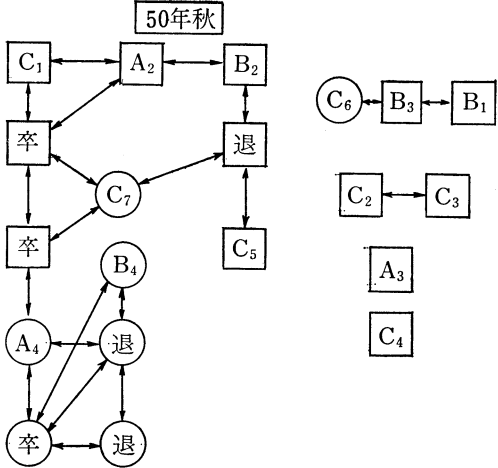
年 齢 ク ラ ス		A	B	C	D	検定
1 回当りの使用遊具数	50年秋	0.393	0.473	0.481	0.502	*
	51年春	0.525	0.595	0.601	0.568	n. s.
	51年秋	0.562	0.569	0.595	0.619	(*)
	3 回の平均	0.493	0.545	0.559	0.563	*

表2は（使用した道具の種類）を（観察回数）で割ったものであり、一回当りに幼児が何種類の遊具で遊んでいたかをしめすものである。5日間の組ごとの平均をしめしている。このことから、年齢が増すにつれて、遊具を選択し、あまり多くの道具を使用しない傾向があるといえる。逆に年少組になるほど、一つの遊具にじっとしていないで、いろいろな道具の間を渡り歩いているといえる。ただ、この傾向は50年秋の観察では顕著であったが、51年度の観察では、全体的に遊具の使用量が増えているなかで、特にA組の遊具の使用量が増加し、年齢クラス間に有意な差がみられなくなっている。やはり、前述したように、年長児の

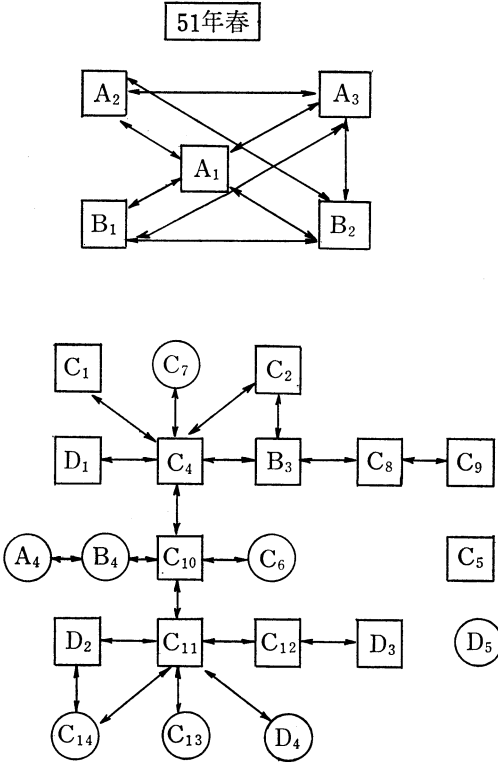
表 4 一緒に遊ぶ仲間の数

ク ラ ス	性	50年秋	51年春	51年秋
A ₁	男	休	2.85	3.00
A ₂	男	2.75	3.50	退
A ₃	男	2.41	3.05	2.50
A ₄	女	3.08	1.95	2.19
A 組 平 均		2.75	2.83	2.45
B ₁	男	2.58	3.06	3.25
B ₂	男	2.83	3.08	2.81
B ₃	男	3.27	3.58	2.93
B ₄	女	2.80	2.72	2.20
B ₅	女			2.55
B 組 平 均		2.90	3.12	2.73
C ₁	男	2.42	2.65	2.84
C ₂	男	2.33	2.62	2.32
C ₃	男	2.04	休	2.16
C ₄	男	1.69	3.25	3.68
C ₅	男	2.30	2.36	2.75
C ₆	女	2.43	2.88	2.36
C ₇	女	3.28	2.40	2.35
C 組 在 園 児 平 均		2.35	2.67	2.60
C ₈	男		3.04	2.26
C ₉	男		3.17	2.18
C ₁₀	男		3.56	2.11
C ₁₁	男		3.10	3.70
C ₁₂	男		1.50	3.50
C ₁₃	女		1.78	2.63
C ₁₄	女		1.92	3.31
C 組 新 入 園 児 平 均 (51年 4 月 入 園)			2.60	2.79
C 組 平 均		2.35	2.61	2.66
D ₁	男		2.23	3.12
D ₂	男		1.49	2.20
D ₃	男		1.32	3.35
D ₄	女		2.74	2.78
D ₅	女		1.42	3.30
D 組 51 年 4 月 入 園 児 平 均			1.91	2.95

図 4 ソ シ オ グ ラ ム



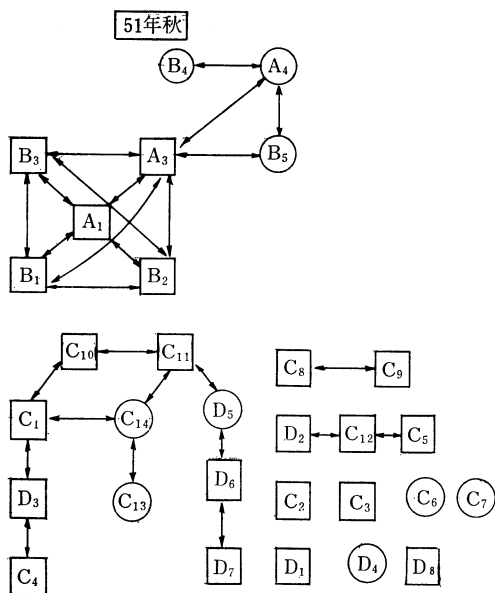
注. この図は図3と同じものであるが、年齢クラスを昭和51年度分には書き直し、関係部分だけをとり出してある。



D ₆	男		2.28
D ₇	男		2.66
D ₈	男		2.28
D組51年9月入 園児平均			2.44
D組平均		1.91	2.75

とあまり一緒に遊んでいなかったが、A・B組の女兒が合わせ2人となったため、相互選択率0.850と、いつも一緒にいるようになった。C組の在園児と新入園児の仲間の数は平均すると大差はないが、新入園児では、いつも3人以上の仲間と遊んでいたのが4人いる反面、1人台が3人と両極端に分かれた。D組は平均2人弱と他のクラスにくらべ、極端に人数が少なくなっている。そして、これら新入園児たちはC₁₁を中心として、新入園児たちだけのグループをつくっているが、その結びつきはあまり強くない。

51年秋になると、A₂が退園し、そのかわりにA・B組のグループにB₅が入り、A・B組のすべての男児と一緒に遊ぶグループになった。その結びつきは不動のものである。またA・B組の女兒もB₅の入園で、A₃も加わえたグループとなった。このようにグループが定着してきたためか、一緒に遊ぶ仲間の数は春にくらべて、やや減少している。B₃、C₂、C₄を中心としていた在園児のグループは上級生のB₃が抜けたためか、バラバラになってしまった。特にC₂とC₈は双生児で50年秋の観察では0.674と高い相互選択率であったにもかかわらず（51年春はC₈骨折休園中）、秋には0.224にまで落ち、互いに孤立した状態になっている。しかし、在園児グループの一緒に遊ぶ仲間の数にはあまり変化はなかった。これに対して、新入園児グループには大きな変化があった。平均すると大差ないが、春の観察では、3人以上の仲間と遊んでいたC₈、C₉、C₁₀が平均2人程度に減り、逆に1人台だったC₁₂、C₁₃、C₁₄が2.6～3.5人と大幅にふえたのであった。この新入園児のグループはC₁₀—C₁₁—C₁₄の結びつきは春と同様であったが、他のメンバーはかなり入れ変り、在園児とも交わるようになっている。またD組の仲間の数が大幅に増加しているのが目立っている。



このように、幼児は3才すぎになると、本格的に仲間と交わりをもち始める。このころに“1人遊び”から“平行的遊び”、“連合的遊び”への発達が多くみられ、仲間の数も増加する。しかしグループができて、その仲間関係は非常に流動的で、仲間の数も一定していない。ちょっとした環境の変化によって、仲間と一緒に遊べたり、遊べなくなったりする。5～6才になると、友人関係は幅と深さをしだいに広げ、空間的な接近による遊び友達から、自分の好みにあった特定の何人かと親密に交わるようになり、グループは安定する。そして、その結びつきが非常に強くなれば、排他的な傾向もみえてくる。同時に、年少のころは男女のへだたりなく遊んでいたのが、このころには、異性と遊ぶ機会が少なくなり、同性だけのグループを作って遊ぶことが多い。しかも同年齢、同性の同じグループの中でも、気の合う友達、気の合わない園児の区別がはっきりしてくる。したがって、年齢とともに、一緒に遊ぶ仲間の数も増加するとはいいいきれないのである。

最後に、幼児たちが遊び相手を選択する場合に、どの年齢の幼児を選択する傾向にあるかを調べた。前述のソシオグラムにおいても大体の傾向は把握できるが、ここではもう少し詳しく検討してみることにする。

表5 遊び相手組別選択人数

	遊び相手年 年齢クラス	A	B	C	D	選択確率比較	検 定
	年齢 クラス						
50年秋	A	373	199	117	110	A>B>D>D	***
	B	199	76	139	105	A>C>B>D	***
	C	117	139	160	190	C>D>B>A	***
	D	110	105	190	254	D>C>B>A	***
51年春	A	114	175	159	22	B>A>C>D	***
	B	175	90	271	32	A>B>C>D	***
	C	159	271	706	223	C>B>D>A	***
	D	22	32	223	80	D>C>B>A	***
51年秋	A	48	151	63	27	B>A>C>D	***
	B	151	156	120	44	A>B>C>D	***
	C	63	120	1065	509	C>D>A>B	***
	D	27	44	509	250	D>C>B>A	***
全 体	A	535	525	339	159	A>B>C>D	***
	B	527	322	530	181	A>B>C>D	***
	C	339	530	1931	922	C>D>B>A	***
	D	159	181	922	584	D>C>B>A	***

a) A組について

50年秋においては、A組の遊び相手はA組が圧倒的に多く、B組との交わりは半減する。さらにC・D組と遊ぶ確率はB組の半分となる。51年度は前述したように、A組の人数が少人数であったため、B組と遊ぶことが多くなっている。しかしC・D組と年少組になればなるほど一緒に遊ぶ確率が少なくなっていることは昨年と同様である。

b) B組について

3回の観察において、いずれも一番よく遊んだのはA組とであり、B組同士の交わりが少し少ないのが特徴である。50年秋の観察ではB組同士の交遊は、A組、C組より少なかった。これはこの時のB組の構成メンバーが、男女それぞれ3名ずつとなっており、男女が交わって遊ぶことが少ないからであろう。しかもソシオグラムにも表われていたように(図3)B組の幼児同士の相互選択がなく、また孤立児が2名いたこともこのような結果になった一因をなしていると思われる。この年齢クラスもD組と遊ぶ確率ももっとも少ない。

c) C組について

C組はC組同士で遊ぶことが最も多い。続いてD組が多い。ただ51年春の観察時だけは、D組よりもB組とよく遊んでいた。これは、C組の中の在園児グループがD組時代によく遊んでいたB組の仲間(当時はC組)とよく遊んだためと思われる。しかし春から秋へと、遊びが発達するに従い、B組とC組にはっきりと差があらわれ、それぞれのグループで遊ぶようになり、B組との交わりは最低になった。

d) D組について

いずれの観察においても、D組同士で遊ぶことが最も多く、次にC・B・A組の順となっている。ただD組同士で遊ぶといっても、年長組のような特定のグループが構成されているわけではなく、偶発的な接近によって遊んでいるということはいうまでもない。

全体的にみれば、幼児は遊び相手を選択する際に、年齢のはなれた幼児とはあまり交わらないといえる。このころの幼児のあそびの発達が目ざま

しく、2年も違えば、あそびの内容がかなり違い、年長の遊びに年少の子どもはなかなか加われない傾向がある。

要約 4つの異なる年齢段階の幼児集団における自由あそびを観察し、遊戯活動における特徴を年齢別にさぐり出し、その発達ぶりを検討した。我々はとくに幼児たちの使用した遊具と彼らの仲間関係に視点をあて、分析を試みた。観察は50年秋、51年春、51年秋の3回、各々5日間ずつ行ない、対象となった園児は2才8カ月から6才7カ月までの幼児、延べ82名である。この観察において次のようなことを見出した。

1) 幼児は、年齢が増すにしたがって、“静的な遊び”から“動的な遊び”へ、そして単調な遊具から、運動能力や技術を要する遊具へと変化している。ただ“ひとり遊び”から“平行遊び”、“連合遊び”を通して“協同的・組織的遊び”への発達の变化は、50年秋では観察されたが、51年度ではあまり観察されず、この結果だけでは速断できない。

2) 幼児は、年齢が増すにしたがって、遊具を選択し、あまり多くの遊具を使用しない傾向がある。逆に年少組になるほど、一つの遊具にじっとしていないで、いろいろな遊具の間を渡り歩いて

いるといえる。

3) 幼児は、3才すぎになると、本格的に仲間と交わりをもち始める。このころに“1人遊び”から“平行的遊び”、“連合的遊び”への発達が多くみられ、仲間の数も増加する。

4) しかし、グループができて、その仲間関係は非常に流動的で、仲間の数も一定していない。

5) 5～6才になると、友人関係は幅と深さをしだいに広げ、空間的な接近による遊び友達から、自分の好みにあった特定の何人かと親密に交わるようになり、グループは安定する。

6) 幼児は、遊び相手を選択するさいに、年齢のあまりはなれた幼児とはあまり交わらない。

7) 年少のころ、男女のへだたりなく遊んでいた幼児は、年齢が増すにつれて異性と遊ぶ機会が少なくなり、同性だけのグループを作って遊ぶことが多い。

8) しかも、年齢が増すにつれて、同年齢、同性の同じグループの中でも、気の合う友達、気の合わない園児の区別がはっきりしてくる。

9) したがって、年齢とともに、一緒に遊ぶ仲間の数も増加するとはいいいきれない。

田淵創，田中國夫，幼児のあそびの発達，日本教育心理学会第18回総会発表論文集，1976，p.182—183.

田淵創，田中國夫，幼児のあそびの発達(2)日本教育心理学会第19回総会発表論文集，1977，p.226—227.